高等部・最高学部

国際交流を通した平和理解

国際センター　早野曜子

2025 年の海外交流プログラムでは、夏休みに学園全体で行った「戦争の記憶・記録を訪ねてみよう」のテーマに沿い、訪問先の国における戦争や内戦について学ぶ機会を設けた。また 2024 年に行ったポーランド研修でも戦争と平和について考える機会を得た。

高等部生のフィンランド留学、デンマーク研修、カンボジア研修、そして最高学部生のポーランド研修での経験についてまとめる。



図１　　交流先の学校

フィンランド

ヘルシンキから北へ320km に位置するアラヤルヴィは、ロシア国境から約 430km 離れている。今回アラヤルヴィ高校のエンミ先生に案内していただき、第2次世界大戦跡地を訪問した。



写真１　塹壕跡



写真２　森の中に保管されている戦闘機

生徒の感想

「8 月 20 日　今日は、フィンランドのアラヤルヴィから少し離れたメンキヤルヴィ近郊にある、第二次世界大戦中にロシアとの戦闘で使用されていた戦闘機や戦車、防空壕を見学しました。実際に当時使われていた防空壕や戦車の内部に入り、当時の兵士たちがどのような環境で戦っていたのかを肌で感じることができました。厳しい自然環境の中で築かれた技術や工夫には、驚きました。」

「第二次世界大戦中に使われていたフィンランドの施設を見学しました。当時のヨーロッパの技術力の高さや、フィンランドでどんなことがあったかを学べました。日本以外の国の戦争のことを知る機会はこれまであまりなかったので貴重な体験でした。」「第二次世界大戦中にロシアとの戦闘で使用されていた戦闘機や戦車、防空壕を見学しました。防空壕は実際のものではないようですが、どこの国にもこうした戦争の背景があることを再認識しました。」

フィンランドは「敗戦国」

フィンランドは 1939−1940 年(冬戦争)、1941−1944 年(継続戦争)と2度にわたり、ソ連(現ロシア)と戦争をしている。継続戦争では、ナチスドイツの援助を受けソ連と戦ったた

め、敗戦国となった。日本では、8 月 15 日を第 2 次大戦の終戦記念日としているが、フィンランドには終戦を記念する日はなく、1917 年 12 月 6 日のロシアからの独立記念日に第 2 次世界大戦の戦没者慰霊も行っている。

デンマーク

デンマーク研修では、フュン島にあるオレロップに滞在した。オレロップ体育アカデミーは 1920 年に創立されたフォルケホイスコーレ（国民高等学校）で、全寮制の学校である。自由学園とは 1931 年から交流を続けてきた。



写真３　防空壕保存会のオーグ氏の説明

研修では、映画『僕の家族と祖国の戦争』[1] を鑑賞し、デンマークにおける第 2 次世界大戦がどのようであったかを知る機会を設けた。

この映画はフュン島にある別のフォルケホイスコーレで実際に起きたことを基に作られた映画で、オレロップでも撮影が行われた。ドイツから貨物列車で送られてきたドイツから



写真 4　防空壕内の展示

の難民が学校の体育館に滞在していたことや、難民に対するデンマーク人の意識など私たちが知らない歴史があった。

8 月 20 日は、オレロップ体育アカデミー横の防空壕を見学した。防空壕保存会のオーグさんから、第2次世界大戦中オレロップの3つの学校（教員養成大学・体育アカデミー・職業学校）がドイツ軍に接収され、800 名のドイツ軍兵士が滞在していたことや、ドイツ軍がイギリス軍からの空爆を避けるために防空壕が掘られたと説明があった。[2]

またドイツ軍に対してレジスタンス運動（草の根の抵抗活動）が盛んに行われていたが、活動は、秘密裡に行われていたため、近所の人でも誰が活動家かはわからない状況だったことなど教えていただいた。



写真５　オレロップの学校脇の防空壕

防空壕は戦後長年放置されていたが 2003 年に保存会が立ち上がり、歴史を伝える活動を行っている。防空壕内には、レジスタンス運動の記録や、当時駐留していたドイツ兵の記録が展示されていた。

デンマークは 5 月 5 日がドイツからの解放記念日で、毎年防空壕では式典を行なっている。

生徒の感想（下線は筆者。以下同）

「防空壕はすごく良い学びになりました。映画で見たことが実在したんだと鳥肌が立ちました。ここで同じことがあったと思うともっと身近な話で、どこかの誰かの話ではないことを実感しました。ドイツに背けば撃たれて死ぬことは、あの時代では日常だったことに恐ろしさを覚えます。」

[1]『僕の家族と祖国の戦争』
https://www.youtube.com/watch?v=rdXXMhxfvbg

[2] 防空壕　https://ollerupbunkeren.dk/?id=42

「防空壕の見学はとても面白かった。映画を事前に見ていたお陰で情景が想像できたし、4 匹の豚の絵を上手く折ると 5 匹目の豚がナチスの顔になるというのがとても斬新なアイディアだった。」



写真 6　防空壕の展示

「オレロップの近くの防空壕に行ったが、自分の想像していた日本のような防空壕とは違い、しっかりとしたトンネルのようだった。オーグさんという方に案内してもらい中は M 字の構造になっていて、様々な展示があった。レジスタンスの話からドイツ軍の話まで様々な事を聞くことが出来た。ドイツ軍兵士がレジスタンスによって殺されていた事やナチスを馬鹿にする遊びが流行っていた事、イギリスを応援する為の帽子など初めて知る海外の戦争の話でとても驚いた。デンマークの人達の為に作られたものではなく、ドイツ軍の為に作られていた事を知り、当時のドイツ軍の支配力の強さを感じた。展示では銃弾などもあり当時の状況もどことなく分かるような気がした。」

「防空壕での学びでは、今でも使おうと思えば使えるくらい当時から強い作りで凄いと思ったし。ナチスが豚と言われていた絵の紙をみて、そういう事だったのかと納得することもできました。」



写真 7　防空壕内

「オーグさんの案内で防空壕見学をした。2 ヶ所入れた。出来事の日付の関係が実に詳細で、本当にそこで生きた人たちがいるという事実が立ち上がってくるようだった。こうやって歴史資料が残って研究されて公開されるって、素晴らしいことだと思う。先日部屋の窓から描いた煙突、あれが当時占領されたホイスコーレだそうだ。映画で観たことが今立っているここで、起きた。レジスタンスのリーダーはあの（近くにある）貴族の館のおじいさんくらいか。そう思うとなんとも言えない気持ちになった。」

「防空壕でレジスタンスの話を聞いていて、『ドイツが降伏した日にレジスタンスは急に増えた』という事を聞いて、誰もが勇気を出せるわけではなく、自分の身の安全がある程度保証されたり、相手が弱い立場になった時の方が当然人は立ち上がりやすく、その姿勢は未来から見ると少々醜く見えるのだなと感じた。けれどそういった行動は生物としては当然の行動だと思う。むしろレジスタンスの人々はそういった人間の当たり前に反抗し、己の尊厳と自由のために戦った姿勢が美しすぎただけなのかもしれない。」



写真 8　オレロップに輸送されたドイツ難民

「防空壕では、防空壕が作られたのは、ドイツ人がいっぱいいたからここを狙われるかもしれなかったという話を聞いて、今の日本もアメリカが戦争を始めれば米軍基地がたくさんあるから狙われるかもしれない状況で、似たような状況だなと思いました。日本にあった防空壕は 1 本線のようなもののイメージが強くありましたが、ここの防空壕は M 字型で被害が減らせてよく考えられていたのだと思いました。」

コペンハーゲンでは、アレロッド高校の生徒と一緒に、自由博物館（Museum of Danish Resistance）を見学した。ドイツと陸続きのデンマークは 1940 年 4 月 9 日の早朝、ドイツ軍がデンマークへ侵攻し、6 時間後には降伏した。博物館には、レジスタンス活動を行った人物の様子が具体的に語

られ、またデンマークナチ党の記録も展示されていた。

生徒の感想

「レジスタンス博物館はすごく“本物”にこだわった展示に見えた。致命傷となった銃痕の残る服が何人分も展示されていたり、暗号で情報を送る模擬体験があったり。進みが早くてじっくり見たり聞いたりできなかったけれど、すごく印象深い時間を過ごした。事前勉強って大事だなと思った。映画を見て、防空壕に行って、そして博物館。とてもいい勉強ができたと思う。」

「戦争の博物館に行きました。そこでは日本がイギリスやアメリカと戦争をしている時のデンマークの戦争のことだったり、戦時下おける人々の生活が展示されていました。配給の制度みたいなものが日本以外の国でも行われていたことを初めて知りました。日本から見た戦争を知れる機会はたくさんありますが、他国から見た戦争を知れる機会はあまりないので、良い経験になりました。途中アレロッド高校の子が分かりやすく説明してくれました。」



写真 9　自由博物館（レジスタンス博物館）

「レジスタンスミュージアムへ行った。ドイツ軍による占領下で水面下で活動していたレジスタンスの事が詳しく書かれていた。分からない所はアレロッドの生徒が詳しく教えてくれて理解しながら展示を見ることが出来た。生徒の 1 人のキャロラインがずっと隣に居て、説明をしてくれて分からない事があると、ジェスチャーや翻訳を使ったりとキャロラインも英語が苦手だと言っていたがお互い理解し合って話せていたのでとても面白かった。」



写真 10　内部展示

映画鑑賞と防空壕見学は自由学園の生徒だけで行ったが、自由博物館はアレロッド高校の生徒と一緒に見学した。

アレロッド高校のソフィ先生が戦後 80 年について一緒に学ぶことに賛成してくださり、共に平和を考える機会を持つことができた。 自国の歴史であるアレロッド高校の生徒と、自由学園の生徒では立場が異なる。一方で、戦争を知らない同世代という共通点もある。お互いの立場を理解することで自分たち世代が平和を維持していく意味を考える機会となった。

カンボジア



図２　カンボジア研修の訪問先

高等部のカンボジア研修では、キリングフィールドとトゥールスレン博物館見学を通し、ポル・ポト政権下のジェノサイド（大量殺戮）と平和について学んだ。[3]

生徒の感想

「私は、カンボジアに行く前から『世界が平和になってほしい』と強く思っていました。でもどこかで、『知らない国

[3] 自由学園年報第27号,2023 https://www.jiyu.ac.jp/documents/pdf/2023/32

の、知らない人たちの話』という気持ちもあったように思います。

今回のカンボジア研修を通して、タイとカンボジアの間で起きた戦争のことを、現地の人たちからたくさん聞きました。みんなが『早く戦争が終わってほしい』と心から願っていて、その思いを世界中に伝えてほしいと話してくれました。その話を聞いてから、私は心の底から『カンボジアに早く平和が訪れてほしい』と思うようになりました。それは、カンボジアで出会った大切な人たちが、自分にとって特別な存在になったからだと思います。」

「カンボジアに行く前はワクワクして楽しみな気持ちが強く、5 月のニュースを見ても、どこか他人事のように感じていました。日本のように安全ではない場所だろうと想像し、『帰れなくなるかもしれない』『家族と会えなくなるかもしれない』という不安もありました。

実際に行ってみると、現地の人は一つ一つの行動が感動するほど温かく、戦争や生活の現状もありのままの言葉で伝えてくれました。先生方やガイドさんも常に安全を考えてくれ、荷物を置いた時には『ちゃんと見ておくからね』と守ってくれました。思っていたよりも安全で、不安はなくなりました。



写真 11　トゥール・スレン虐殺博物館見学

クメール語は予想以上に発音や文字が難しく、短期間で身につけるのは大変でしたが、簡単な挨拶はできるようになりました。どこへ行っても温かく迎えてくれ、ああ、日本よりあったかい国だと何度も感じました」

「私が滞在中にもっとも印象に残ったことはポル・ポト政権時代の大量虐殺に関する展示を見たことです。ガイドの『血は川のように溢れ、家族は海のように泣いた』という言葉と、犠牲者一人ひとりの顔写真を目にした瞬間、胸が締め付けられ、言葉を失いました。過去の悲劇があったからこそ今の平和なカンボジアがあることを知り、この現実を決して忘れてはいけないと心に深く刻まれました。そして、自分がここで見たことを、まだ知らない人に伝えていく使命を強く感じました。」



写真 12　キリングフィールド見学
（チュンエク虐殺センター）

「ポル・ポト政権の大量虐殺の展示を見て、言葉では表せないほどの衝撃を受けました。『血は川のように溢れ、家族は海のように泣いた』というガイドの言葉が心に深く刺さり、胸が締め付けられました。私は今まで、平和や命の尊さを十分に意識せずに過ごしていたことに気づきました。悲劇の歴史を知ることで、日常の当たり前がどれほど大切で、守られるべきものなのかを強く感じました。

この研修を通して、私は与えるだけでなく,受け取る心を持てる自分になったこと、そして自分の目で見たことを、まだ知らない人に伝える責任を感じる自分に変わったことに気づきました。子どもたちの笑顔と歴史の悲しみ、両方を体感したことで、私は以前よりずっと感受性豊かで、人の温かさや平和の尊さに心を動かされる自分になったと思います。」

「私が思う国際理解や国際交流とは、ただ相手の国や文化を知ることではなく、相手の人と心でつながることだと思います。カンボジアで FLO という孤児院や小学校の子どもたちと過ごしたとき、言葉はあまり通じなくても、一緒に遊んだり笑い合ったりすることで、心が通じ合う瞬間を感じました。子どもたちの無邪気で純粋な笑顔や、手を合わせて喜んでくれる姿に、私自身が幸せや温かさをもらいました。また、ポル・ポト政権の大量虐殺の展示を見て、過去の悲しい歴史や人々の苦しみを知ることで、その国のことをもっと深く理解できました。国際交流は、ただ物を与えたり文化を

学ぶだけでなく、相手の気持ちや現実を受け取り、自分自身の考えや心も変わる体験だと思います。そして、こうして学んだことを他の人にも伝えていくことも、大切な国際理解の一部だと感じます。」

「行ったこともない国に対して少しの知識だけでマイナスな偏見を作っていたけれど、行ってみてやっぱり現地に行ったからこそ分かったその国の良さや偏見の違いを感じることが出来た」

引率教員のコメント「生徒が『学ぶ側』から『受け取り、考え、伝える側』へと変化していく過程に立ち会えたことは、大きな喜びでした。悲惨な歴史と人々の温かさを同時に体感し、自分の言葉で平和を語ろうとする姿は、この研修が確かな学びとなった証だと感じています。」

ポーランド

最高学部はポーランドのスウプスクにあるポメラニアン大学と 2016 年に交流協定を結び、これまで自由学園から 5 回、ポーランドから 4 回の相互交流を行っている。

2022 年のロシアによるウクライナ侵攻以来2回にわたり、ポメラニアン大学へ避難しているウクライナ人家族や学生へ寄付を送付してきた。2024 年の研修は、ウクライナでの戦闘開始後、最初の訪問となった。

学生たちは、大学で開催されたオープンキャンパスの様子と、その後参加した会議について報告している。

学生報告

「高射砲に様々な武器を展示しているポーランド軍、医者の研修生、楽器や歌を披露する人々や空手を子供に教えている黒帯おじさんなど様々な人達で賑わっていた。

僕たちはまとまって様々な場所を廻ったが、とても印象に残っている出来事がある。

それは、僕たちがポーランド軍の展示ブースを訪れた際、実際に使われている実銃に触れる機会があった。僕たちは日本では滅多に触ることの出来ないそれらを手に取り次第はしゃいだ訳だが、その時僕たちのことを見ていたポーランドの友達のユリアンに“What you think about when you held the guns？”と聞かれたのだ。僕はすぐには英語では答えられなかったものの“I didn’t know guns were that heavy. I used to think weapons were cool, but I still don’t want to kill people with them or get killed by them.”(あんなに銃って重いんだね、昔は武器ってカッコイイなって思ってたけど、やっぱりあれで人を殺すのも殺されるのも嫌だな)と答えた。そうしたらユリアンは“I think so too”と答えてくれた。



写真 13　ポーランド軍の展示

ポーランドは 2 度も国が地図から無くなった国であり、ポーランドにとってポメラニアン大学を含め祖国を守る為に国も備えておく事は日常の 1 部なのかもしれない。

続いてスウプクス市初の女性市長に、ポメラニアン大学関係者、ポメラニアン大学が提携を結んでいるウクライナの大学学長の方々、そして我々自由学園が招待され、歓迎会兼「いかに平和を築くか」の会議を行った。会は市長のポーランド語をポメラニアン大学のマレックさんの英語通訳を通して我々に伝えられた。



写真 14　市長との会議の様子

改めて、今自分たちがいる近くで起こっているウクライナーロシア間の戦争について、当事者であるウクライナの方々とそれをサポートしている人たちの間で一丸となって平和のことについて話し合うことが出来て、とても光栄に思うと共に、もっと現地の人と関わり、ウクライナの事、ポーランドの事、いかに平和を築くかについて聞きたいと感じた。」

ポメラニアン大学滞在後、グダニスクへ移動し、アウシュビッツ＝ビルケナウ強制収容所を訪問した。



写真 15　アウシュビッツ見学

「アウシュビッツを後にして、過ちを繰り返さないために、過去を知ることの意味がようやくわかった気がする。今回、中谷さん（ポーランド公認ガイド）の案内のもと、アウシュビッツを見て回って、彼が時々問いかけてくることが印象的だった。

『民主主義をどうあつかうのか。それを君たちは背負っている』」



写真 16　中谷ガイドの説明

「民主主義とは何か。ヒトラーを選んだのは誰なのか。博物館では民主主義が崩壊する過程をよく表している。ただ残忍な行為が行われていただけではなくて、どのようにして、どんな残忍なことがあったのかを知ること、人間が人間を選別すること、争いによって命の重さが変わってしまうこと。今、パレスチナやウクライナが大変な時に、ここに来られたことの意味を問えること。

過去を見た自分が、問いを持って今を見ることができ、かつこれからをつくる立場であることを、実感を持って再認識する機会となった。」

スウプスクからグダニスクへ鉄道で移動後、第二次世界大戦ミュージアムを見学した。[4]



写真 17　第 2 次大戦ミュージアム内の様子

学生報告

「1939 年にドイツ軍がこのグダンスクへ侵攻したことにより開戦した第二次世界大戦をテーマにした壮大なミュージアムだった。

展示は、WW I 後からヒトラーの君臨、ソビエト・ドイツの対立、戦禍のポーランド、戦争の終結と続いた。世界がファシズムに飲み込まれる流れの中、「八紘一宇」と大きく掲げられたブースがあった。

ドイツに続きイタリアや日本でもファシズムへの賛同が起こる。ヨーロッパにおいて、それらとソビエトの対立は、やがてポーランドを分断する。私が今立っているポーランドは、ひいては日本も含めたファシズムによる被害国と言えるのではないか。

4 https://muzeum1939.pl/en

英語のキャプションも十分には理解しきれないだけ、展示物・映像・音楽・展示ブースの照明、温度、空気感、周囲の観覧者の会話などすべてが心に切に迫った。

日本による加害の歴史の展示の前で、私は１人猛烈な非難を受けている気がした。瓦礫に佇む少年少女たちの写真に、亡くなったユダヤ人の顔に顔向けできなかった。

展示は終戦へと向かい、広島・長崎への原爆投下についても取り上げられていた。

多くの人命を無に帰し、祖国ポーランドを打ち倒した国々。戦勝国と敗戦国、そして戦前・戦中・戦後と続く粛清。戦争としては至極真当な流れに震えた。

ポーランドの日々はあと数日。しかし日本人としての生活は続く。この経験が私に何をもたらすか、期待に胸が膨らむ。」

日本の新聞やニュースで得られるウクライナやポーランドの情況についての理解と異なり、実際現地に行き、学生たちはポーランドが平和を維持するためには軍備が必要である現実を目の当たりにしたことや、日本の加害国としての歴史にポーランドで触れたことは大きな意識転換となった。

その他　グリーンランドのこと

2026年1月28日　最高学部でデンマーク語を教えているリセ・スコウ先生から米国のグリーンランド領有化に関するニュースについて時事解説をしていただいた。[5]

グリーンランドは 1721 年からデンマークの植民地とされ、1953 年には、デンマークのひとつの県に承認され、その後 1979 年に自治領として独自政府をもつようになった。

リセ先生のお話では、デンマーク政府が 1950 年代に行った同化政策などの歴史もあり、グリーンランド人にとって、デンマークとの関係は複雑な情況である。

北欧と第 2 次世界大戦

今回、フィンランド・デンマークの第 2 次世界大戦の歴史を学び、生徒たちは「世界大戦」と言いつつ、これまで北欧の戦争の歴史についてほとんど知る機会がなかったことや、気付かぬ偏見への気付きがあった。殊に北欧としてデンマーク・フィンランドを一括りで捉えがちであるが、地政学的背景は大きく異なる。

1938 年に北欧 4 カ国共同中立宣言が発表されたが、その後フィンランドは2度にわたり、ソ連（現ロシア）と戦い敗戦している。

ソ連の脅威に対抗するため、ドイツと協定を締結したフィンランドにおいては、「連合国対枢軸国の戦い」あるいは「独ソ戦の一部」とする見方では捉えきれない複雑な様相を持った戦争であった。[6]

一方デンマークは 1940 年にドイツ侵攻され、5 年間にわたり占領された。ドイツ占領下では、グリーンランド防衛のため、連合国であるアメリカ軍がグリーンランドに駐屯し、現在も基地が存続している。

第 2 次世界大戦後、1949 年にデンマークは NATO に加盟、一方フィンランドは隣国ロシアとの関係から、中立を保ってきたが、2022 年のロシアによるウクライナ侵攻を契機に、2023 年に NATO へ加盟している。

現在デンマーク・フィンランドは自国の軍備に加え、EU 加盟国としての共同防衛、NATO 加盟国としての集団軍備と、3つの軍事体制を有している。

米国のグリーンランド領有に関するニュースに接し、フィンランドとデンマーク、それぞれ異なる戦争歴史の背景が、現在直面している世界情勢に影響していることを改めて知ることとなった。

今後の平和教育の課題

2022 年に始まったロシアとウクライナの戦争は4年経つ現在も継続している。戦争は遠い過去の出来事ではなく、現在進行形の事実である。

今回デンマークの戦争歴史について学ぶ中で、Victim（被害者）としての戦争の記録だけでなく、Victimizer（加害者）の歴史も常設で展示されていることの意義を痛感した。

負の歴史を語ることは、とくにその時代に生きた人が生存しているうちは、むずかしい面がある。

しかし「戦争」は双方が被害者であり、加害者でもあるという事実を私たちは知らなくてはならない。

国際交流を軸とした平和教育を考える上で、私たちは、過去の歴史の上に現在があることが、「今ここにいる自分」の原点だと気付く必要があるのではないか。

---

[5] https://www.jiyu.ac.jp/blog/intl/90323

[6] 東海大学文化社会学部北欧学科編（2023）『北欧学のすすめ』東海大学出版 p.63-65

異なる文化背景をもつ他者と交流する上で、自分が見えていることだけでは相手は理解できないということの自覚、相手に対する無意識の先入見の自覚、相手について知ろうとする態度、自分と他者が同じ人であることの共感、他者と協働して平和を実現するには、一方の論理だけでは実現しないこと、そのためにはアサーティブな対話を成立させることが必要であろう。

戦争を直接経験していない世代が平和をどのように構築していくのかは重要な課題である。大国の利害によって正義が決められてしまう現状を踏まえ、次世代を担う生徒たちが「平和とは何か」を主体的に考える機会を、今後も継続して提供していく必要がある。

「隣人を自分のように愛しなさい」と聖句にあるように、目に見える身近な隣り人との間に、平和が実現できる人を育成していくことが課題である。